

**1年A組図画工作科・佐々木恵実践「ぐう、ちょき、ばあで、へんしーん」
—図画工作科「学びのものさし」の構築へ—****1. 題材「ぐう、ちょき、ばあで、へんしーん」の成功要因**

本題材に取り組んだ子供たちは、試行錯誤をいとわず、最後まで思考停止に陥ることなく手を動かして、自分の形や表し方を追究していた。成功要因の1つとして指導者は、導入で「見付けた折り方や切り方を子どもたちの言葉」で示して「本時ではどんな折り方・切り方を試すか」という見通しをもたせたことを挙げている。このことで指導者は、子供たちに「学びのものさし」を確かめさせたとし、更に「前時までと本時の学び」をつなげるという機能を果たしたと分析している。この分析に筆者も同感である。筆者が考える図画工作科での指導者、つまり教員の役割や立ち位置の理想を示してくれたと考えている。

成功要因はこれだけでない。本題材は単純に「造形遊び」、「絵」、「工作」などと、たった1つに限定できるものではない。例えば、「造形遊び」のよいところも十分に含まれるように構成されていた。公開授業では「造形遊び」の本質である「自分なりのイメージを基に、思いのままに発想や構想を繰り返す、手や体全体の感覚などを働かせながら技能などを発揮していく」という姿も十分に確認することができた。子供たちの興味や意欲が持続して、まさしく「発想や構想を繰り返す」であり、「手や体全体の感覚」が活性化していた。本題材は多様なねらいや内容が、子供たちの実態に合わせて構成されていたので、図画工作科が願う子供たちの姿を具現化することができた。

2. 本題材の可能性について

前述したように、本題材での授業は成功であり、本校以外の小学校教員にとっても、今すぐに実践の糧となるだろう。本実践を参考にしようとする教員の方々には、次のことを参考にしていきたい。

本題材の全時数は5時間で、前述のように多様なねらいや内容が要素が組み込まれていた。ここでもう一度、公開された公開授業での子供たちに姿を振り返ると、入学して間もない時期の子供たちなので、折って切ることをのみを提案する「造形遊び」としての視点に絞っていくことも考えられる。子供たちが自ら生み出した「知識」や「技能」を認識して習得したり、活用したりすることだけに集中させるということが可能と考えられる。

切ってつくった形を飾りにしようという発想や、並べたりつないだりしようとする構想などは、「造形遊び」としていけば、子供たちから湧き出てくることに任せてよい。もし出てこないとしても、題材として十分に成立する。学級の状況によるが、全時数は削減される。ただし、「造形遊び」に絞っても、佐々木恵先生のように子供たち一人一人とつながっていることが基盤であることを忘れてはならない。

なお、「造形遊び」というと、「自然物」だけが材料と思われがちである。「造形遊び」の趣旨を考えると、子供たちが創造的に造形できるのであれば、「人工物」でも大丈夫である。材料が色紙だった本題材で、子供たちが常に「創造的」であったことを考えれば、同感いただけるはずである。合わせて、筆者は入学から子供たち全員が持っている「算数セット」を材料としても、豊かな「造形遊び」が展開できると考えている。

3. 図画工作科の「学びのものさし」

図画工作科では、子供たちの表現や鑑賞の過程や方向性が拡散的である。図画工作科では他教科よりも一人一人の学びの歩みが、指導者の予想の範囲を超えて広がる。指導の難しさでもあるが、子供たちの成長には望ましいことで、慌てないでほしいと筆者は日頃から考えている。

収束的ではなく、拡散的になることが必然的な図画工作科の表現や鑑賞の学びでは、子供たち一人一人の個性的で独立した探究となる。よって、学びの歩みにおいて、子供たちは他者を頼りにくいので「迷い」を生み出していく。ここで図画工作科の「学びのものさし」が登場する。

図画工作科の「学びのものさし」は、子供一人一人が自分のゴールに到達するための「地図」、「方位磁石」、「ツール袋」などであると筆者は考えている。この「学びのものさし」は、子供たちが相互鑑賞や美術家などの作品鑑賞、系統的指導の中での試行錯誤を大切にされた造形活動などの積み重ねによって、更新され、成長すると考えている。

子供たち一人一人が、確信して、あるいは安心して「自分」の「学びのものさし」をもてるために、佐々木恵実践を大いに参考にしていきたい。